「漢字を使ったゲームや遊びで集中力や考える力が育つ」

第二ひかり幼稚園（川崎市）
高島田史子先生

私自身、この幼稚園に来た当初はそうだったのですが、大人にとっては、漢字って「難しいもの」っていうイメージがありますね。だから「どうして幼児に漢字を？」と思ってしまいます。でも、子どもたちには、そもそも漢字とかひらがなとかいう区別がないので、難しいことをやっているという意識はないのです。『論語』や『百人一首』にしても、子どもには何の先入観もないので、ふつうのお話と同じような感覚で読んでいます。

それに、入園したての年少さんの場合、まずは幼稚園の生活に慣れることからスタートしますが、そのときに「これが上履きですよ」「これが黒板ですよ」と教えるときに、一緒に漢字で「上履き」「黒板」と書いたカードを見せたりと、身のまわりのものから自然に漢字に触れていくので、子どもたちは、まったく抵抗なく入っていけます。

カリキュラムには、絵本やその月毎の漢字カードの他、『論語』や『百人一首』など、一日の中でもいろんな項目があるので、知らない人が聞くと、漢字ばかりやっているような印象を受けるかもしれませんが、実は一つの課題にかける時間は、五分とか十分といったとても短い時間で、これを一日何回かくり返す形をとっています。ですから、ふつうの幼稚園でやるお絵描きや工作、歌、体操などの時間も、もちろんきちんとあります。

なぜ、そんな短い時間で区切ってやるかといいますと、子どもと大人では時間の感じ方が違うからなのです。大人なら一つのことを三十分、一時間と長くやっても平気ですが、子どもの場合、いろんなことに次から次へと興味が湧いてくることもあって、短時間で区切って、くり返しやったほうが集中力も持続しやすいのです。

漢字ゲーム「魚釣り」の教材

それに、少し前にやったことをまた後でやると、同じ内容でも。あ、これ、さっきやったから知ってる」と感じることができる、それが子どもたちには、すごく嬉しいみたいなのです。

子どもたちが漢字に接するときは、いつもゲーム感覚で楽しめるように、先生方もそれぞれに工夫しています。たとえば、ふだん使っているカルタ以外に、動物の名前を書いた漢字とその動物の絵を合わせたり、子どもたちが魚屋さん、八百屋さんなどのお店屋さんに分か

れて、魚屋さんになった子は、たくさんあるカードの中から「鰯(いわし)」や「鯛(たい)」など魚屋さんで売っているものを見つけて待ってきます。また「公園」や「駅」などの漢字カードと絵を合わせて、好きなところに貼って街をつくる遊びなども、子どもたちの好きな遊びです。一応、基本的な遊びというのはありますが、それをもとに「こんなことやったら楽しいかな」というアイデアをそれぞれが考えて、そのための教材を用意したりしています。

子どもたちを見ていると、「スゴイな」と驚かされることはしょっちゅうです。年少さんでも、新しく出てきた漢字がたまたま誰かの名前に入っている字だったりすると、「あ、これ〇〇ちゃんの字だ！」と、子どものほうから反応してきますし、だんだん漢字に慣れてくると、一つの文字を全部見せず、上や右から、少しずつ見せていっても、ほんの一部を見ただけで、もう何の字かわかってしまいます。

それに、はじめて見る漢字でも「これ『魚』っていう字がついてるから、魚の仲間だね」とか「『森』っていう字は、木がいっぱいあるね」とか、こちらからは何も説明していないのに、そういう発見が子どもたちから自然に生まれてきます。

子どもたちは純粋に漢字の形から入っているので、子どもたち白身が「もしかしたら、この字は、こういう意味なのかな？」と自分で考えることができる、そのことが何よりも素情らしいと思います。